

街談
巷議

台湾タイヤル族の村訪問記

(東京新聞記者) 佐々木理臣

一 はじめに

この報告は、1999年9月、台湾台中県和平郷平等村の環山地区で行った、タイヤル族住民らに対する聞き取りをまとめたもので、骨格の一部は同年9月18日付東京新聞紙上に掲載した。

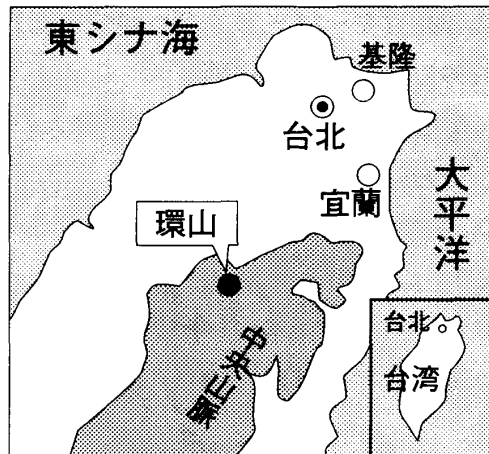
筆者は台湾少数民族の専門家ではない。また現地滞在が極めて短時間だったために、台湾少数民族問題を突っ込んで論じた報告とも言えないであろう。一日本人の見聞記であり、民主化と社会の多様化が進む台湾にありながら、漢民族文化の激しい浸透の前に「存亡の危機」に直面しているとも言われる先住民族居住地域の将来に僅かに関心を払いつつ記した「現状報告」であることを予めご了承願いたい。

二 「環山」という所



山あいの斜面に広がる環山の集落。左手前が小学校。右奥に教会が見える。

山道を喘ぐように上っていたバスが、峠を越えて大きく左カーブを切ると、視界が一気に開けた。右手の眼下に箱庭のような集落が見える。



「環山」だ。正確な行政区分は、台中県和平郷平等村環山。台湾北部の小都市、宜蘭（人口約45万人）から、一日2便の路線バスで3時間余り。ようやく着いた。

「環山派出所前」バス停で降りると、射るような陽ざしだ。海拔1700メートルの高地とはいえ、北回帰線をわずかに北へずれた南国の夏はやはり暑い。

日本統治時代（1895－1945年）に、警察を使って末端を管理した“派出所行政”は国民党が改めた⁽¹⁾はずだが、先住民族⁽²⁾は、初訪問の日本人との山の落ち合い場所を派出所に指定した。居合わせた駐在の警察官に、先方へ到着を伝えてくれと頼むと「はいはい、お暑いところを。いますぐ来ますよ、先ずはお掛けになって。これでもどうぞ」と飲み物と椅子を勧め、電話連絡してくれた。

——この辺は凶悪事件はあるのか？

「滅多にない。たまに喧嘩くらいか。殺人事件？ 相当以前からありません」

——貴官の職務上の心配事は？

「目下は、道路脇の梨の出荷作業で、公路が渋滞しかねないこと」

——上から環山の全景写真を撮ってもよろしいか？

「ン？……どうぞ、ご自由に。アッ、来ましたよ」

待つ間のわずかなやりとり。同じ田舎の警察官でも、以前によく取材した大陸の奥地と態度がだいぶ違うな、と思っていたところへ、日本から事前に電話連絡していおいたタイヤル族の女

性、詹秀美（70歳、日本名＝小林淑子）さんが現れた。

「遠いところをようこそおいで下さいました。首を長くしてお待ちしておりました」と、いきなり丁寧且つ極めて流暢な日本語できた。詹さんは背丈は中位。やや細身だが骨格はガッチリしたタイプ。祖父テモルックン氏（故人）は環山地区の頭目（酋長）だったという。

派出所から、かなり急な坂道を10分ほど下ると環山の集落に入る。海拔1500メートル。人口約550人、戸数約200戸。97%前後がタイヤル族⁽³⁾だという。台湾の山岳地帯に先住民族の村は少ない。しかし「漢人」（中国人）⁽⁴⁾の入植による同化にさらされている所が多い。環山は昔から「民族意識」「集落意識」が強く、在留者の“単一民族性”がかなり良く保たれているという⁽⁵⁾。訪問先に環山を選んだ理由も、主にこの点にあった。

バス道路から急角度で落ち込んだ山の斜面が、ややなだらかに変わった場所に集落は展開している。南北約350メートル、東西はざっと250メートルほどか。日本に似たプレハブ住宅が目につく。教会⁽⁶⁾が集落北側に2軒、中央部とやや南側に各1軒。南端に小学校1軒。

その名⁽⁷⁾のとおり、四方はすべて山。バス道路からは、台湾第2峯の「雪山」（3,884メートル。旧称＝次高山）⁽⁸⁾が望めたが、約200メートル下がった集落の中心部からは、周囲の山々に遮られて見えない。年間降雨量は2000ミリ前後。冬期は朝夕、気温が氷点下に下がる日もある。集落から、下り斜面をさらに約300メートル崖状に落ち込んだところに五つの溪谷⁽⁹⁾が流れている。下り斜面の多くは、激しく侵食されており極めて険しい。

三 飛び交う日本語

環山に入って、まず最初に驚いたのは、村人た

ちの日本語の巧みさだ。

「遠いところをお疲れでしたでしょう。まずはお茶を。ちょうど梨の取り入れの時期なんです。どうぞ召し上がって」（詹さん）

まるで日本人、と言うより、昨今の若い日本人よりずっと正確で、しかも丁寧な日本語を使いこなす。詹さんは、小学校の六年間と補習科⁽¹⁰⁾の三年間、みっちり日本語をたたき込まれた。その後も日本の登山者相手の民宿を経営するなど、時代時代で遠近はあっても、常に日本語と接してきている。これほどうまいのは特異な例なのだろうと思ったが、これは間違いだった。

——お子さんは何人ですか？

「よったりです。にんにじょで、おとこおとこ、おんなおんな。おんなふたりは、かたずきまして、ぜんぶでまごがくにんおります」と詹さんの姉で元看護婦の黄銀杏さん（74歳）。やや古い表現が混じるのが、よけいに流暢に聞こえるのかも知れない。

詹さんと踊り仲間の黄陳阿市（日本名＝古田竹子）さん（64歳）に、いろいろと日本語で聞き出そうとすると笑いながら「私は（日本語が）あまり達者じゃないから」とはにかんだ。これはご謙遜で、かなり上手なのだが、やはり詹さん姉妹に比べると、語彙が少なく、正確さもやや欠ける感じを受けた。

詹さんの長男で平等村前村長の梁一正（日本姓・吉田）さん（48歳）によると、環山で日本語がうまいのは、若くても学校で専門に日本語を学んだり、職業上日本人と頻繁に接する機会があるような特殊な人の例を除くと、主に60歳以上の人たちだ。特に65歳以上のほとんどは完璧に近い日本語を話す。

戦後も54年。65歳の人にとって、日本語教育が途絶えたのは、小学校上級生のときということになる。60歳を境に、日本語能力がガクンと落ちるのは、言うまでもなく戦後、外来政権として

台湾へ渡来した国民党が全島で北京語による新たな同化政策を導入したためだ。

ところで環山の人たちの日常会話は、中年以上の場合にはタイヤル語が多い。だがタイヤル語の会話の中にも、相当の割合で日本語が混在している。

例えば、呼びかけの言葉。

「おーい、こばやし」

「ねえねえ、みよちゃん」

数詞の日本語も生き残っている。

「さんじゅっさい××」「じゅうごねんで××」
(××の部分にはタイヤル語につき、意味不明)。

そのほか「えんぴつ」「かばん」「スリッパ」「きもの(主に和服を指す場合)」「おしょうがつ」「らくせん(落選)」「きょうそう」。「けんこーほけん」というのもあった。余談だが、台湾社会には「うんちゃん」が定着している。以前に台北で、20代の若者に「うんちゃんは、運ちゃんという日本語から来ている」といくら説明しても、「台湾語だ」と言い張るのに閉口したことがある。今回、聞き取りを行ったタイヤル族のほとんどは「日本語は便利だ」と語った。戦前、北京語が浸透する前に、タイヤル語から日本語へと“ワープ”を強いられ、タイヤル語にはなかった日本の諸語表現が、外来語としてそのまま生活に深く定着した、ということであろう。

「昔(日本統治時代)は学校では日本語。家ではタイヤル語と日本語の両方。よその人(他の先住民族や中国人)と話すときも日本語を使っていた」と年配者たちは言う。

17世紀初頭から、中国大陸からの入植漢民族が増え、先住民族は次第に山地へと追い込まれた⁽¹⁾。山は深い。道路網や通信網が未発達だった当時は、民族ごと、集落ごとの行き来も容易ではなかったはずだ。

「民族によって言葉は大きく違う。また同じタイヤル族でも、集落により言葉や住民の性格にかなりの違いがある。我々は歴史的に集落ごとに酋

長を頂き、その命令は強い力を持ってきた」⁽²⁾と梁一正さん。言語が、民族と地域で異なっていた所へ入り込み、日本語を初の共通語として教え込んだのが戦前の日本人だった。タイヤル族が独自の言語を守りながら、戦後の共通語である北京語を「便利な言葉」と認識する時代は来るのだろうか。それとも圧倒的な漢民族パワーの中で、タイヤル語は日本語もろとも消滅して行くのか。

日本語が良く残っている理由の一つは、テレビ(ほぼ全戸に普及)の衛星放送だ。環山の約三分の一の戸数に当たる50-60戸が、NHK衛星放送の“配信”を受けている。各戸にパラボラアンテナ設備が有るわけではなく、“集中受信”した地元業者が、有線で再配信したり、ビデオデッキで人気番組を録画し、ビデオテープで“作品”として売っているのだ。新聞(漢字の台湾紙)の購読率はかなり低い。小学校などの公共機関を除くと、定期購読者は非常に限られている。老年層にとって日々、中国語の新聞で世情に接する機会が少ないことも、日本語が生き残っている原因の一つと思われる。

老年層の多くは「日本のテレビ番組は、よくできている。台湾のテレビ局も三チャンネル入るが、北京語放送がほとんどだ。細かいところが聞き取れないし、内容も今ひとつだ」と印象を語っていた。“三つ子の日本語、百まで”という感じだ。

日本でも時代とともに「死語」が出るように、環山でも死語になった日本語があるはずだ。日本語の残った言葉と滅びた言葉の比較検討は、タイヤル族の生活文化を知る上でも興味深い。今後の研究課題としたい。

四 日本の印象

詹さんが三年前に建てた登山者相手の民宿(三階建て)に、幅30センチほどで横は何メートルもある自織の布が何枚も飾られている。布には、台湾各地をはじめ東京、大阪、名古屋、岐阜、金

沢、島根など日本の地名が黒のサインペンでビッシリと書き込まれている。「宿泊名簿」だ。

環山は、戦前から西に聳える玉山（旧称＝次高山）への登山口だった。戦後も旧台湾第一中学校のOBら登山愛好家が訪れ詹さんの民宿などを拠点にしてきた。「台湾一中は名門で、卒業後、帝大（台北帝国大学・現台湾大学の前身）へ進んだ人も多い。ですから、環山は地理的には山岳地帯の中に孤立しているように見えるが、インテリが最新のニュースをもたらす“文明拠点”だった」と一九五〇年以来、大体隔年ごとに環山を訪れている台北在住の林淵霖さん（75）＝台湾林業試験場客員研究員、中国文化大学土地資源系教授＝は分析している。

今回、環山で聞き取りを行った範囲では、住民たちの日本に対する印象は、戦前戦後を問わず決して悪くなかった。特に詹さんは、「熱烈」とも言えるほどの日本最良だ。

「百年生きてても日本人から受けた恩は返しきれない。環山をたくさんの人々が訪れる。私の民宿にもいろいろな人が泊まるが、日本人は非常に礼儀正しい。室内に展示してある民芸品を黙って持っていってしまうような人もいない。泊まった室内はきちんと片付けて帰る。帰国した後も、約束通り手紙や記念写真をちゃんと送ってくれる。年配者も若い人もそうだ」

詹さんは民宿経営者という立場でもあり、日本人と直接的な利害が絡む。他の住民の対日観、日本人観はどうか。

「以前に村へ来た日本の人にタイヤル族の踊りを披露したら、そのお返しだといって日本に招いて下さったんです」と林鄭秀玉さん（65）。（林は夫の姓、鄭は父親の姓）。

タイヤル族の女性は、とにかく踊りと歌が好きだ。林鄭さんが、日本に招かれた名目も島根県大田市の団体の招聘で「関の五本松」の踊りを習いにいったのだという。



タイヤル族の女性は歌と踊りが大好きだ。
中央が詹秀美さん（環山の詹さん宅で）

「日本では皆さんがとても良くして下さいって、人情に厚いのに感激しました」。環山では、今でも正月や催し物があると和服を着る風習が残っている。それを知った大田市の人たちがたくさんを着物や浴衣を贈り、林鄭さん自身も緋の着物などを何枚もお土産に買い込んだという。

住民たちは、日本統治時代を今、どう振り返っているのだろうか。

「小学校の先生も派出所の巡査も厳しかったですよ。先生は遅刻したり行儀が悪いと立たせて厳しく叱った。だから学校は嫌だった。でも今から思うと、運動会やら学芸会やらで派出所や学校に集まってみんなで楽しんだのは本当に良い思い出ですよ。厳しかったのは時代が違うからです」（イワルワラン＝日本名、高木百合子さん、78歳）

「長久保」という姓の巡査部長の献身的な勤務ぶりが、今でも環山の年配者の間では語り草になっている。同氏は昭和十年代の半ばに環山に赴任。三年間、住民とともに茅葺きの家に住みながら日本語とタイヤル語を互いに教えあった。当時地元

はまだ洋式の下着や衣類が十分に普及していなかった時代。総督府から住民に配給になった毛布や衣類はもちろん、自分が官給分として受け取った物資の多くも住民たちに分け与えたという。

同氏は環山から転勤した後もずっと台湾の山岳地域に留まり、そのまま骨を埋めたらしく、環山から車で南へ二十分ほどの梨山地区に墓があるという。

もう少し若い世代の日本の印象はどうか。

「今の台湾の基礎を作ったのは日本だ。十九世紀末から50年間かけて、道路、鉄道、都市計画とすべてやった。日本は国土は狭いが、国民にパワーがある。勤勉で何でも正確にきちんとやる民族だ。だから繁栄したが国民性は保守的だと思う。新しいことに乗り出すのが、本質的に苦手なんじゃないか。特に国際政治の面では弱過ぎる」(梁一正さん48歳)

「日本の技術は世界一だ。コンピューターの製造は台湾も一流だが、日本から学んだものだ。教育レベルが高いからいろいろな発案ができるのだと思う。台湾の生活にも日本のものがずいぶん入ってきている。台湾も民主化を達成した。これからどんどん発展すると思う。日本は昔も今も先輩ですよ」(地元の平等国民小学校の王一道校長、39歳)

小学校へ行くと、ちょうど給食に入る前の時間で、廊下に子供たちが大勢集まっていた。その中で一人、「あいうえお」という発音を友達に聞かせている女の子がいた。日本でも流行の底の高い靴を履いた6年生の陳子珊さん(12歳)。どこで覚えたのかと尋ねると、「叔母さんが日本人と結婚した。夏休みに日本へ遊びに行ったら覚えた」と言う。

「日本は楽しかったよ。みんなよく働く。街はとてもきれいだった」。叔母の嫁ぎ先は埼玉県鳩ヶ谷市と言う。子供の目にも日本人の働き蜂ぶりが忘れられないらしい。

仕事柄、アジアはずいぶん歩いてきた。その中で、台湾の人々が最も日本に好意的であると言う印象は前々から受けていたが、環山の人々が示すほどの親日の情に接したのは初めてだった。台湾に限らず、取材で訪れた先で、日本人、特に新聞記者であるが故の“外交辞令”を受けることは、しばしばある。しかし、本当の好意か否かは、何となく伝わって来るものだ。

「この親日感情は、どこから来るのだろうか?」——なおも環山の人々と接するうち、その不思議さが、少しずつ解けていった。

五 漢民族に対する印象

「何を言っているのかさっぱり分からない。通訳してちょうだい。いつも騙すんだから」——詹さん宅で取材しているところへプロパンガス業者が来た。検針を兼ねたガスコンロの点検らしいのだが、業者がボンベのコック部分を指差しながら「壊れている」と言うのと詹さんは急に興奮した口調で言った。

代わって、どこがおかしいのかを尋ねると、業者はこちらを華僑の客とでも思ったのだろうか、コンロに火を付けながら北京語でまくし立てた。

「ほら、コンロの火が赤い。不完全燃焼を起こしている。ボンベのコントローラーがいかれてるんですよ。早く変えないと中毒を起こしますよ」と業者。それを詹さんに伝えると「ついこの間、3000元(一元=約四円)も出して取り替えたばかりじゃないの! 去年から三回も変えているんだから。漢人は人を騙してばかりいる。(業者に)言ってやってください」とカンカンド。

やっかいなことになったな、とは思ったが、詹さんの言葉を業者に伝えた上でこう質問してみた。

「コンロの二つのバーナーのうち、右のは確かに火が赤い。でもよく見てごらん。左の方は青い火が燃焼口から少し離れて浮きあがっているじゃ

ないか。コントローラーより空気孔の調整がおかしいんじゃないの？ 調べてあげてよ」

すると業者は、ビクツとしたような顔をして「そうかも知れない。今日は時間がないので、今度来たときに見てみます。それから、コントローラーを最近変えたのなら、保証書があるはずで取り替えは無料です。伝えておいてください」と言い残して立ち去った。

「保証書？ そんなものくれませんでしたよ。いつも、ああやって山の人を騙すんですよ。漢人は本当に信用できない」と詹さん。



流通を握る「漢人」たちは、名産の二十世紀ナシの出荷に汗を流していた（環山派出所前のバス道で）

漢人（中国人）は、村周辺の流通を中心とした商業のほとんどを握っている。

例えば、名産の梨。タイヤル族には土地の耕作権があるが、やるのは果樹の手入れと取り入れ、集荷までだ。バス道へ上る集落の外れの集荷場で梨を紙に包んだり、箱詰めしていたのはタイヤル族。それをトラクターなどで坂の上に届けた後は、漢人の業者が街の卸売業者に運ぶのだ。

もっとも、実際には耕作権自体を漢人が持っている場合も多い。耕作権の売買は、本来禁止だが、漢人が現金と引き替えに、ヤミでタイヤル族から買い取る。漢人は化学肥料など“文明の利器”を投入し、効率よく実らせようと全力を挙げるが、「最近、土地が痩せてきた」と嘆く声も聞いた。

漢人が果樹の耕作にタイヤル族を賃労働で雇っている場合もある。

NHK衛星放送の“配信”も漢人が独占している。日本放送協会と漢人の契約内容までは確かめる余裕がなかったが、環山近くのパラボラアンテナで漢人が電波を受信。それを集落の家々に有線配信したり、番組を録画したビデオを売るのが。配信は月極契約で1000元（約4000円）。「高い」と梁さんも高山さんも言ったが、「普通のテレビの番組は、北京語でよく分からないし、面白くないから契約するしかない」と言う。

テレビ、ビデオテープレコーダーや最近流行のカラオケセットを持ち込むのも、漢人の業者。集落内には小さな雑貨屋程度しかなく、バス道周辺の食料、日用品を売る商店のほとんども漢人の経営だという。

悪徳利殖業者が村を跳梁しているとも聞いた。詹さんも被害者の一人だという。

年利2割からの高金利をエサに村人に近づき、「皆さんから集めたお金を資金に、株や商品取引をすれば、もうかる」と言葉巧みに「利殖」を勧める手口だ。

「これまでに騙された現金の総額は、500万元近い。騙した業者は、皆漢人だ。互いに連絡しあっているんですよ」と詹さん。

特に、農地の耕作権を年単位契約で漢人に譲り、現金が入った後が狙われ易い。

漢人の“ネットワーク”は広く、タイヤル族住民に関する細かい情報も、たちどころに集まるようだ。

周知のように、台湾の漢民族は、戦前からの「本省人」と戦後、大陸で国共内戦に敗れた国民党政権とともに渡ってきた「外省人」（人口比で約13％）に大別される。両者の対立「省籍矛盾」は時間の経過と経済発展、民主化が進む中で漸次、沈静化しつつあると言われ、初の本省人総統である李登輝総統は、台湾全島を運命共同体に見立て

た「新台湾人」の概念を打ち出している。

しかし「我々にとってみれば、どちらも外来の支配者には変わりはない」と梁さん。台湾と大陸との関係を「特殊な国と国の関係」と位置づけ、北京政府の逆鱗に触れた李登輝総統の「二国論」について梁さんは「漢人同士のいがみ合いに過ぎない」と言い切る。太古の昔から台湾に住んできた、先住民族の声が少しも反映されていないと言うわけだ。

1624年、オランダが台湾を占領。対岸の中国大陆から渡来する漢人が増え始め、先住民族を圧迫しながら開拓を本格化。その後、明朝、清朝と十九世紀末まで支配者が変遷し、日清戦争後の1895年から半世紀に渡って日本が支配した。



詹秀美さんは、昔のタイヤル族が使った生活用具を多数集めて保存展示している（環山の詹さんの民宿で）

近代に入ってから日本の支配で台湾が受けた得失については、すでに識者による多数の研究が発表されており、ここでは梁さんの評価を中心に筆を進める。

梁さんは「日本人が台湾支配で悪いことをしなかったとは、もちろん考えていない。反発が起きる原因があったからこそ、霧社事件のような悲惨な出来事も起こったのだが……」とした上で、こう述べた。

「私はよく考える。我々の教育レベルは高い。体や身の回り、公共の場所を清潔に保つことなど、

衛生観念も徹底している。外の世界が広く、若いうちにいろいろな知識を学ぶものなのだという習慣も身に付いている。こういった観念を最初に植え付けてくれたのは、誰だったのかと」

そして、さらに続けた。

「タイヤル族は勇敢です。団結心も強い。これは私の誇りです。戦争中に高砂義勇隊というのが日本軍によって組織された。調べてご覧なさい、南方の激戦地で、米軍と最も勇猛果敢に決戦に挑んだのは、タイヤル族が一番多いんですから」

だが「日本を恨んだりとか、そんな問題じゃない」と梁さん。「我々の父母や祖父母は日本人として祖国のために戦ったんです。我々が半分は日本人なんだということを忘れないで下さい」。

漢人に対しての思いはどのようなだろうか。

「自分たちの文化、やり方が当然だと思っている。自分たちの利益のことしか考えていない。相手の文化を認めないから、いわゆる『平埔族』のように同化され、はっきりした存在さえ分からない民族も出た。そうなるのをどうしても避けたい。追いつめられて同化してしまったら、民族の誇りが失われてしまうからだ」

本省人と外省人への評価はどうか。

「両方ともマーマーフーフー（性格がアバウトなこと）で基本的には同じようなものだが、本省人の方が少しはましだ。外省人は結局はよそ者。本省人は、台湾のことは台湾人がやるんだ、という意識を少しは持っていると思う」

最近の台湾の急速な経済発展についても独自の見解を語った。

「何事も基礎がなければ発展しない。台湾には、オランダ時代から、支配者が持ってきた良いものが徐々に蓄積されてきた。そういう遺産があったから発展できたんだ。漢人が有能だったために、台湾が良くなった訳では決してない」

来春には李登輝総統が退く。総統選を目指して既に「本省人」の陳水扁氏（前台北市長）、「外省

人」の宋楚瑜氏（前台湾省長）、「半山」の連戦氏（副総統）の三有力候補が鎬を削っている。

「李登輝さんは本省人で、かなり頑張ったが、やっぱり外来民族支配の痕跡を残した過渡期の政権だった。今度の選挙では、より台湾人のための台湾を考えられる陳水扁さんを台湾の大統領に選びたいですね」

先住民族として“新大統領”に求めたいことは

①土地の所有権の返還

②環境問題の重視。特に環山の水に頼っている、下流の大都市台中による環山への環境整備と経済支援

③環山人口の90%を占める農民への技術・資金援助

④地域中核病院の建設

——と極めて具体的な要求を列挙した。

最後に梁さんは「台湾の本当の主人公は、我々先住民族だ」と力を込めた。

「我々は漢人の文化に影響を受けてきたが、同時に先住民族も台湾の漢人に様々な影響を与えて来た。新しい時代の足音が聞こえているが、大陸とは違うのだという全台湾の一致点（アイデンティティー）の根源になるのは、我々先住民族の文化なのだ」

1987年の戒厳令解除（金門・馬祖を除く）を境に、台湾の民主化は急進展し、先住民族も次々に声を上げ始めた。

差別撤廃を訴えるデモ、それまではタブーとも言えた先住民族に関する様々な報道、先住民族の被害者も多いと言われる女性人身売買糾弾——等々。1993年に台北の国際空港で、マスクや覆面をした多数の女性たちが「暴力団と私娼街撲滅、公娼を認知せよ」と訴えるデモに遭遇したこともある。

現状に対する先住民族の不満は大きいようだが、環山の住民の不満は経済的苦しさから出ているものが多い。前述のように9割以上が農業従事



環山の集落には、日本に似たプレハブ住宅も多い（環山の中心部で）

者だが、悪天候に祟られ今年はモモが実らず収入が減少。ナシも近年は平地で作られる安価な品が出回り、値崩れ気味だ。

「漢方薬の材料になる、付加価値の高い茶や薬草を植えるように進言しているのだが、なかなか頭の切り替えができないようだ。このままでは結局、商品経済に敗れ、不利な条件で都会へ出ていくことにならざるを得ない」と前出の林教授。牧歌的な外観とは裏腹に、環山は伝統文化を守っていけるか否かの正念場を迎えている。

六 山の小学校

環山のたった一つの小学校「台中県立平等国民小学校」は、環山集落の南端にある。

運動場が見渡せる校長室を訪ねると、王一道校長（39歳）が「日本からですって、ようこそ！」と、事務仕事の手を休めて室内に招き入れてくれた。

同校は、日本統治時代の1914年、「鹿洋番社」の児童教育所として、茅葺きの教室一つから始まった。当時の校舎は現在より200メートル北西（集落の中心部に近い方角）にあったが、火災で焼失し移転。開校当時は15人の児童を日本人教師が一人で教えた。昼間多忙な農民らを対象にした夜間部も併設され、子供から老人まで約50人

が学んだと記録されている⁽¹³⁾。

同校に通う児童は「環山」「武陵農場」両地区に住む住民の子弟で、王校長によると、現在の児童数は1-6年生の合計36人（男児24人、女児12人）。このうちタイヤル族は8人で残りは漢民族。「三十五年前は、200人以上の児童がおり半分以上がタイヤル族だった」（梁一正さん）と言うから、街へ出る若年層が多いことと、漢民族の割合が増加していることがはっきりと読みとれる。



平等小学校の児童たちは、わざわざタイヤル族の民族衣装に着替えて記念撮影に応じてくれた。前から2列目の左から2人目が王校長（平等小学校で）

澄み切った空気の広々とした校庭で、サッカーなどをして遊ぶ子供たちは元気いっぱいだ。「少数派」のタイヤル族の児童に、教室でどんな配慮がされているのだろうか。

「タイヤル族の伝統文化を重視する教育は、もちろん実施しています」と王校長。

タイヤル語の学習時間を毎週一時限（40分授業）設け、タイヤル族と漢民族の児童と一緒に学んでいるほか、歌や踊りを学ぶ授業もある。タイヤル語の教科書⁽¹⁴⁾を見せてもらった。

人称代名詞、数詞、日常生活で使う基本的な名詞、動詞、それに簡単な文節や会話もある。挿し絵を使ってタイヤル語⁽¹⁵⁾の発音をアルファベット表記し、漢字で何を意味するのかを覚えさせる方式で、B5版大の本文は31ページ。主に低中学年

用という。

教師九人中、タイヤル族出身は経歴三年の若い女教師が一人だけ。北京語の本格学習は三年生からだが、通常の授業は北京語で教えており、五年生からは英語も始まる。漢民族には本省人が多く、漢民族の子供たちが家庭などでは主に台湾語を使い、タイヤル族の子供がタイヤル語や台湾語を使うケースが多い⁽¹⁶⁾ことを考えると、やはり北京語教育が優先されている。

この点を尋ねると王校長は「環山の若い人のほとんどは街へ出る⁽¹⁷⁾。北京語が出来ないと生活していけない時代です」と力を込めた。王校長が今、最も重視しているのはコンピューターを使いこなす教育。今年8月の着任直後、早速コンピューター教育の専門教室を開設。真新しいコンパックの端末がズラリと並ぶ室内で、「3-6年生全員にEメールと文章作成を教えています。都会の子供に負けないような最先端の教育を行いたい」と意欲を語った。

台湾の教育程度は高く、小中学校の就学率はほぼ100%。終戦前年の1944年段階でも小学校就学率は92%を超えていた⁽¹⁸⁾。しかし環山住民（860人）の学歴を見ると、小学校卒約400人、中卒250人、高卒（職業学校を含む）85人、大学・専門学校卒62人——となっている⁽¹⁹⁾。山間部住民が教育を受けるチャンスが、都市部に比べて少なかった実態が浮かび上がってくる。

詹さんが2度の結婚で生んだ3男3女のうち、環山に残ったのは長男の梁さんだけ。

「せめて娘一人は、日本人と結婚させたいが、長女と次女は米国人と結ばれ、米国と日本へ渡った。これも教育のせいですよ」とさんは台北在住の三女（33歳）に期待をかけている。

校門を入ったすぐ右手の校舎の壁面いっぱいに、タイヤル族がまだあまり外来文化の影響を受けていなかった頃の環山の様子が描かれていた。

空と川は青。原野は緑。季節設定は夏のように

も見えたが、遠くの山々の嶺は雪を頂いている。民族衣装で狩りをする人々は薄着だが、機織りや粟撞きの様子は寒い季節のようにも見える。きっとカラフルで野性的な暮らしの様子を思いのままに描写したのだろう。

どんな人が描いたのだろうか。王校長に尋ねると、“我が意を得たり”というような表情をしながら早速、作者を呼んでくれた。

洪秋岩さん（77歳）。タイヤル族とも台湾人とも違う感じなので不思議に思っていると、日本語で「わたし、満州族ですよ。遠かったなあ（遠いところへよく来ましたね）。（私は、ここで）もう50年だよ」。



タイヤル族の昔の生活を描いた自作を前にした満州族の洪秋岩さん（環山の平等国民小学校で）

洪さんは、吉林省通化県出身。戦後間もなく国民党とともに台湾へ渡ってきた。若いころから絵が好きで、やがて図画の教師に。長年、同小学校で教えたが、現在は退職している。日本語は大陸の小学生時代に6年間教えられたという。

壁画を描いたのは、5年前。満州族が何故、タイヤル族の暮らしを？

「ふるさとと違うが、ここもとても楽しい。民族（タイヤル族）の昔の暮らし、子供たちに教えたかった」。半世紀という時の流れ中で、洪さんの故郷も大きな変貌を遂げているはずだ。異郷で暮らす老画家は、中国大陆のふるさとを思い浮か

べながら、第二のふるさとになった「環山」の昔を描きたくなったのではあるまいか。

暮れなずむ山々を眺めながら集落を散歩していると、つましい家屋の中から中国語で犬を呼ぶ男の老人の声が漏れてきた。

平等小の校務員で、山東省煙台郊外出身の徐敬明さん（79歳）。大陸に妻がおり、戦後二度、里帰りしたが、最近では音信が無く、環山で雌のマルチーズ犬と暮らしている。国共内戦後、国民党兵士として台湾へ。地元で道路建設などに従事するうち、環山に居着いた。タイヤル語や台湾語はできない。

「この年になって、中国人とか台湾人とかあまり考えなくなった。どこで暮らしても、健康で長生きすればいいんだと思っている。一人で寂しくないか？ あちこちに兵士時代の友だちもいるし、村の人たちはとても親切だ。タバコも酒もやらない。まだまだ頑張りますよ……」。徐さんは、こう語りながら、テレビが映し出す北京語版のボパイのアニメ番組に面白そうに見入った。

七 終わりに

9月21未明に、台湾中部大地震が起きたのを知ったとき、私はすぐに東京から環山へ電話を掛けた。だが何十回掛けても繋がらなかった。ようやく連絡が付いたのは、東海村の臨界被曝事故の取材で死のもの狂いになっていた10月2日の夜。公共機関の電話はラインが特別かも知れないと思いつき、王校長の自宅の番号を回すと家族が出た。幸い環山は大きな被害を受けず、死者も出なかったと聞いたときには、ほっとした。その数日後電話線も全面復旧し、聞き取りに応じてくれた村の人々とも連絡が取れはじめている。

私の台湾観は、1991年の春以来、一変した。香港駐在記者（1991年初－93年夏）としてアジアを観察する中で、台湾に最も強い関心を抱いた。

民進党など党外（野党）のデモの現場で、パリ・コンミュン以来の革命歌「インターナショナル」と日本の「軍艦マーチ」が同じグループの街宣車の大スピーカーから流れる愉快さ。大陸のように釣り銭を投げ返さず、タバコ一箱買っても「百元頂戴いたしました。六十元のお釣りです。ありがとうございます」と言う店員の丁寧な態度。街の食堂の清潔さ——等々。これが本当に大陸と同じ中国社会なのかと思った。

台中で開かれた野党の集会の時、会場周辺で「“民主” 香腸（ソーセージ）」を売る屋台の若い女性が、仲間に「よっちゃん」と呼びかけるのを聞いた。「君、いま何て言った？」と確かめたのが、台湾先住民族に関心を持つきっかけだった。

記者の仕事は、特に海外にいと取材テーマが政治や経済に偏りがちだ。「よっちゃんたちは、どこでどんな暮らしをしているのだろう」。ずっと、そう思いながらも、香港、上海と勤務地が変わる中で、案の定、台湾少数民族との再会は果たせなかった。

今回、環山への旅が実現できたのは、宜蘭県で開かれた「1999年度宜蘭杯国際名門大学親善レガッタ競技」に私を招待してくれた、在日台湾同郷会の林建良会長らのご厚意の賜である。競技の取材もそこそこに、「環山行き」を敢行した私のわがままに目をつむって下さった同郷会関係者及び、台北で日本文化を守る運動を続けておられる「美しい日本語を守る会」の陳絢暉会長、林淵霖氏ら同人の皆様のご教示に心から感謝したい。

（了）

[注]

- (1) 日本は1895年の日清戦争で台湾を割譲後、1910年には「理蕃事業五カ年計画」を策定し、本格的な先住民族対策に乗りだした。「威圧」と「懐柔」を巧みに使い分けながらの支配で、先住民族の反発も招き、1930年には台中州霧

社でタイヤル族が在留邦人を襲い、130人余りを殺害。日本が軍を投入して鎮圧にあたる事件（霧社事件）も発生している。その後、先住民族の教化と保護にも力を注ぎ、先住民族の居住地域を「特別行政区」として漢民族の「普通行政区」から隔離。総督府が教育、医療、土地管理などを実施したが、政策実行には警察、特に末端の山地に置かれた派出所が大きな役割を果たした。

戦後、大陸から渡来した国民党政権は、「特別行政区」に変わる「山地管制区」を設置。先住民族居住地域を30郷215村に分け、一般の民政管理系統による地方自治を導入した。（この項、陳元陽「台湾の原住民と国家公園」などによる）

- (2) 台湾の先住民族 最多のアミ族（約13万人）を始めタイヤル族（約86000人）、パイワン族など9民族があり、一口に「先住9族」と呼ばれる。9族の総数は1995年末で約96万5000人（台湾内政部資料による）。戦前、日本人は「高砂族」と呼んだ。台湾全島人口2200万人の約1・6%で、漸増しているが増加率は台湾の漢民族より低い。9族の他に約10の少数民族がおり「平埔族」と呼ばれるが、平地や都市部で生活するケースが増え、漢民族との同化が激しい。
- (3) タイヤル族 台湾の先住民族の中で最も地域分布が広く、中央山脈から東部海岸を結ぶ海拔500－2500メートルの山岳地帯を中心に、台湾北東部一帯から中部の一部にかけて居住している。人口は1995年末で8万5835人。先住民族の中でも台湾に最も早い時期に住み着いたとの説が有力だ（以上は「泰雅采風」＝台湾省教育庁、台中県教育局監修。黄世忠主編による）。尚武の風に富んだ最強の原住民族と評され、戦前、日本の総督府が征服に最も力を入れた民族でもあった（以上は「台湾の原住民と国家公園」陳元陽著）。

- (4) 環山の住民は「中国人」と呼ばずに「漢人(かんじん)」と呼んでいる。何故「漢族」または「漢民族」と呼ばないのか、との質問に対しては「仲間ではないから」と答えた。中国人は数が圧倒的に多く、支配者であるという響きが呼称に感じられる。
- (5) 梁一正(48歳、日本名=吉田一正)の指摘による。
- (6) キリスト教の伝道師は、戦後の1950年代後半から布教を本格的に始めたという。4教会の教派内訳は「天主教」「長老会」「安息日会」「真耶蘇」各1。現在、天主教が42軒で最多(隣長=村長の下で30戸をまとめる=で天主教徒の話による)。
- (7) 環山は、戦後、国民党政権がつけた名前。古くはタイヤル語で「姿がよい」という意味の「スコーヤオ」と自称。日本統治時代には日本語的に「シカヨウ」と訛り、「志佳陽」時として「鹿陽」の字が当てられ、それに山の集落単位を意味する「社」を付けて「志佳陽社」「鹿陽社」と呼ばれた。
- (8) 台湾の最高峰は「玉山」(3997メートル、旧称新高山)。雪山の旧称次高山は、新高山の次に高いという意味。
- (9) 環山は東西を「南湖溪」「七家湾溪」に挟まれた谷間にある。両溪谷にはそれぞれ「合歡溪」「司界蘭溪」が流れ込み、合流して「大甲溪」となり下流の台中方面へ流出している。
- (10) 詹秀美によると、補習科教育は小学校卒業後、特に勉強が好きな児童が受けた。環山には日本統治時代から現在まで、高級中学(日本の高校に相当)が無く、今の高校生たちは、約70キロ離れた学校で寄宿舎生活を送り、週末に自宅へ戻る。
- (11) 「アジア読本 台湾」p 22。笠原政治論文。
- (12) 詹秀美が父親詹徳明(1969年に死去。日本

名=小林勇)から生前、聞いた話として、1930年の「霧社事件」の際、当時、「志佳陽社」と呼ばれた環山の酋長であった祖父、テモルックンは村人に「行くな。村から出てはならない」と厳命。事件への同調者は村から出なかった、という。

- (13) 同校発行の「平等国民小学簡介」(1996年)による
- (14) 「台中県教育叢書第20輯」(台中県政府発行)
- (15) タイヤル語には文字がない。
- (16) 梁一正による。
- (17) 王校長、梁一正らによると卒業後は約80%が平等村へ戻らず、平地や都市での生活に入る。
- (18) 「アジア読本 台湾」P 267、伊藤潔論文
- (19) 「台中県和平郷平等村1996年度村民大会資料」による。

